



学生FD チームニュースレター

やる気スイッチを押してくれた授業って、

どんな授業？



「第2回 東洋 授業への声コンクール」を実施しました♪

学生FDチームでは、東洋大学生がより主体的に学び、行動し東洋大生であることに誇りをもてる大学をめざして、授業をよりよくする取り組みを進めています。

昨年度に引き続き、「第2回 東洋 授業への声コンクール」を開催しました。このコンクールは学生、教職員すべての人たちにとって大学での授業がよりよいものになるよう、広く授業への声を募集し、授業向上へ活かすことを目的と

しています。第2回のテーマは、「やる気スイッチを押してくれた授業って、どんな授業？」としました。

厳正なる選考の結果、今年度の入賞作品が決定しました。ご応募いただいた皆様、ありがとうございました。入賞者の方々への表彰式は、12月20日（土）に白山キャンパス1号館4階1403教室での、「東洋大学サミット 2014 冬」のオープニングセレモニーにて開催されました。

「第2回 東洋 授業への声コンクール」を終えて

神田 雄一（副学長・FD推進センター長・理工学部教授）

「第2回 東洋 授業への声コンクール」のテーマは「やる気スイッチを押してくれた授業って、どんな授業？」でしたが、応募作品はいずれも秀逸な作品ばかりで選考会議では大いに悩みました。ただ前回より若干応募件数が減ったことは残念でした。学生の皆さんは多種多様な授業の中で、ちょっとした心の琴線に触れ“やる気のスイッチ”がポンと入るのだなあと改めて感じました。そんな授業をやってみたいと思いました。最後にご協力いただいた多くの学生諸君、教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。



「学生の皆さんの率直な気持ちに触れ、良い刺激となりました」

齊藤 克弥（学生FDチーム代表・社会学部第二部社会学科2年）

授業に対する向き合い方や向き合うきっかけは人によって異なります。今回はそんな「きっかけ」を知るために「やる気スイッチを押してくれた授業って、どんな授業？」というテーマのもと皆さんから作品を募集しました。私にも「やる気スイッチ」を押してくれた授業が存在します。授業で得られるものは知識だけではありません。たくさんの率直な気持ちに触れ、良い刺激となりました。学生の皆さんから声を受け取る機会は多くありませんが、このような素晴らしい声は励みになります。これからも学生FDチームスタッフとして邁進していきます。

最優秀賞

韻文部門入賞作品

優秀賞

伊藤 智輝さん（文学部日本文学文化学科 3年）
タイトル「ゼミの発表にて」

やる気ある？

その一言で 気がついた
今の自分と 理想の自分

村岡 杏香さん（法学部法律学科 4年）
タイトル「1mでも近くで受けたい授業」

一瞬で

未知の世界へ とりこまれ
今日も私は 最前列

学生FDチームスタッフから

中川 靖菜（学生FDチームスタッフ・経済学部経済学科3年）

コンクールの実施後、受賞者と学生FDチームスタッフとの座談会を開催し、受賞作品や大学の授業について、受賞者の学生より様々な意見をもらうことができた。授業をおもしろいと感じる条件の一つとして、どのような形で先生からのフィードバックがあることが、学びへのやる気スイッチを押すことに繋がるという意見が多く挙がった。今回のコンクールを通して、やはり学生は意欲を持って学ぶことができる授業を求めているということを感じた。次回は、より多くの学生から声が集まることを期待している。

散文部門入賞作品

最優秀賞

「社会を照らす灯」

富 美月さん（社会学部メディアコミュニケーション学科 2年）

「やる気」とは、何か。私は、社会学とメディアを勉強したいという想いをもって、この東洋大学に入学した。学ぶ意欲を持っていた私にとって、「やる気スイッチを押してくれた授業」という言葉は、どこか違和感を覚えるものだった。しかし、「学ぶ意欲」というある種の漠然としたやる気を、「学ぶ理由」に変えてくれた授業があった。つまり、私の心に「真のやる気」を灯してくれた授業だ。

メディアコミュニケーション学科のとある授業では、その週に気になったニュースを取り上げ、自分の意見を述べる時間がある。自分の意見を人前で口にする事で、自分はなぜそのニュースが気になるのか、どうしてそれを人に伝えたいと思ったかなど、様々な事が見えてきた。高校の現代社会とは違う、一人で新聞を読んでいた頃とも違う。単に好きという想いを超えて、「社会で起こる出来事を分かりやすく伝えたい」から、もっと学びたい。漠然としたやる気が、学ぶ理由に変わった瞬間だった。

自分は人生で何をしたいのか。自分の人生を通して社会にどう貢献したいのか。「やる気」とは、個人の想いだけでなく、社会全体を見据えて学び行動することだと私は思う。大学での学びも、社会に還元されうる「やる気」の源であってほしい。学生のそういったやる気は、いわば、社会を照らす灯となるはずだ。

本学の創設者・井上円了は、「人材を陶冶し、人心を修養堅固にし、諸般の原理を示して万事に応用せしむる等、その利を与え世を益すること、実に万世不朽と謂うべし」という言葉を残している。大学の授業は、単に個人の「好き」という漠然としたやる気スイッチを押すだけでなく、社会に還元されうる「真のやる気」を心に灯すものであるべきだと私は解釈する。これからもそんな授業に多く出会えることに期待しながら、社会を照らす灯のひとつとなれるよう、私は一歩あゆみ始めた。

教員から**長谷川 勝久** (FD 推進センター授業評価手法検討部会長・文学部教育学科教授)

韻文部門の最優秀作品は、やる気の根本は自分自身であるというメッセージが高く評価された。優秀作品は、教育の最大の環境は教員であるとのメッセージが読み取れた点が評価された。散文部門の優秀作品は、「やる気スイッチ」は、学生が主体的に学ぶ仕組みが整っていること、知的水準を満たす原動力が授業にあるといった大学側からの視点と、最終的にそれを押すのは学生自身であるといった学生側からの視点の両者から捉えている点が評価された。最優秀作品は、学祖井上円了先生の言葉を引用しながら、「やる気」は、個人の思いだけではなく、自分の人生を通して社会にどう貢献したいのかを見据えて学ぶことで高まるとのメッセージが読み取れた点が高く評価された。ポスター部門は1作品の応募と少なかったので、今後に期待したい。

優 秀 賞**「やる気を生み出す条件への一考察」**

和泉 亮哉さん (文学部英米文学科 3年)

人間のやる気は興味・関心事の高い出来事に引き寄せられる。授業における「やる気スイッチ」とは学生の好奇心の導火線に火をつけるものである。今回は私のやる気スイッチを押す契機となった「英語学演習Ⅱ」を例に、やる気スイッチの条件について考えたい。

この授業は、毎回発表担当者が持ち時間内で英語学の発表を行う、演習形式の授業である。発表者は授業前日までにレジュメを manaba に投稿し、当日発表に臨む。聴講者はそれを読んだ上で参加し、質疑や議論、及びコメントの記入を行う。準備が甘い発表者は容赦なく質疑によって批評されるため、一回一回が真剣勝負である。また、聴講者もただ聴くだけでなく、コメントの内容、発言内容に応じてポイントが加算されていき、一定水準に達しなければ単位が認定されないことから、相互が全力で授業に取り組む仕掛けが用意されている。

こうした学生を自主的に学習に向かわせる仕組みが整備されることが、やる気スイッチの条件の一つだと考える。上記はポイント制を導入することで、授業に緊張感をもたらした好例である、と私は考えている。

次の条件として、学生の知の原動力となる授業である、ということが考えられる。内発的動機づけが刺激される、人間として成長できる、などの原動力を引き起こすような工夫が必要ではないか。先述の授業の例では、他者の発表を聴いて議論してコメントを書くことで視野が広がること、発表者と聴講者の両方の立場を経験することで相手の立場を考えられる人間へと成長できること、などが挙げられる。

以上より、「やる気スイッチ」とは学生が主体的に学ぶ仕組みが整っていること、知的水準を満たす原動力が授業にあること、の二点の条件を満たすものであると考える。しかし、やる気スイッチを提供する授業であっても、最終的にそれを押すのは学生自身である。教員方が授業に散りばめたやる気スイッチを発見し、自ら押す意欲が大切ではないか。

学生FDチームスタッフから**林 大翔** (学生FDチームスタッフ・法学部企業法学科3年)

本コンクールは、様々な学生の声を知ることができ、とても良い機会となった。

自身の授業に対する考えを文字や絵で表すことは、難しいことである。しかし、応募者の方々から送られてきた作品はどれも授業への想いを表した、素晴らしいものであった。

私が東洋大学に入学し、もうすぐ4年目となる。本コンクールを通し、私がまだ触れていない、魅力溢れるたくさんの授業を発見することができた。今後も様々な授業を受け、自身の知識を豊かにしていきたいと思う。

教員から**千明 誠** (FD 推進センター教育改善対策部会長・経済学部経済学科教授)

今回の選考を通じて、「やる気スイッチを押してくれた授業」とは、現状を変えたいという学生の漠然とした欲求（このままでよいのか、今よりもっと成長したい）を自覚化させ、それに基づき学生の成長をサポートしてくれる授業だと感じました。こうした点に気づかせてくれた入賞作品、ならびに応募者のみなさんに感謝します。今後も、学生とともに教職員も成長していけるようなFD活動を展開していきたいと思ひます。

FD 推進センター長賞

「社会を照らす灯」 (散文部門)

富 美月さん (社会学部メディアコミュニケーション学科 2年)

※作品は、散文部門・最優秀賞からご覧ください。

学生FDチームスタッフ賞

「水曜13時のやる気スイッチ」 (散文部門)

徳重 ほのかさん (文学部英米文学科 3年)

水曜日の13時から14時半は、一週間で最も楽しくて充実した90分。米文学演習Ⅰ、アメリカ文学に興味はあったものの、フォークナーに特別思い入れはなかったし、『響きと怒り』もピンときていなかった。お目当ての先生が定年退職を控え、今年は演習授業を持たなかったの、途方に暮れ仕方なくこの授業を取った。

とりたかった授業が取れない、やりたかったことができない。どうしてこの学校のこの学部、この学科に来たのかをわたしはずっと考えていた。そもそもやりたかったことって何だったっけ。そもそも自分は文学なんて好きじゃなかったのかもしれない。そんなことを考えながら、わたしはこの授業を受け始めた。

他の学生の発表や意見はいつも新鮮だった。先生がこの作品、そして学生に対して、真摯に向き合っているのが伝わってきた。他の学生に自分の意見をおもしろいと言ってもらえた。毎回出すコメントカードは、先生が丁寧にチェックを入れて返してくださった。何かしらの反応があるのは嬉しかった。自分の考えを言葉にするのがますます楽しくなった。同時に思考する大変さを思い知った。だからこそ今まで感じたことのないやりがいがあった。やりがいがあったからこそ、コメントカードは毎回熱心に記入して提出した。自分でもびっくりするくらい、レポートもレジュメもきちんと作った。「いつも良いことたくさん書いてくれるから楽しみです」と先生に言っていた。来週もまたがんばろうと思った。文学作品を読むということの意味もわかってきた。授業を重ねるごとに、水曜日の13時が待ち遠しくなった。そうだ、自分はこういうことがやりたかったのだ。大丈夫、自分はやっぱり文学が好きだ。だから東洋大学の文学部英米文学科に来たのだ。そんなことを考えながら、わたしはこのやる気スイッチを押してくれる授業を受けている。

学生FDチームスタッフから

戸田 裕貴 (学生FDチームスタッフ・経済学部総合政策学科3年)

この文章を読んでいる私たちまで講義を受ける楽しさが伝わってくる文章で、この講義のように学生が「楽しい!」と感じてくれるような講義が増えてくれれば良いなと思った。

そして、元々講義に関心のなかった学生が最終的には次回の講義が待ち遠しくなるようになるまでのプロセスがとても明確であった。今後も徳重さんにはこの講義のように「頑張ろう!」「待ち遠しい!」と感じてくれるような講義を受けてほしいと思った。

石井 俊輔 (学生FDチームスタッフ・国際地域学部国際地域学科3年)

こういう先生の授業ってやる気であるよね!と言いたくなるほど、共感できる。

徳重さんの「水曜13時のやる気スイッチ」は、学生の心境をありのままに表現するのはもちろん、先生と学生、学生と学生の積極的なコミュニケーションの大切さを表現している。もし東洋大学が本気で世界ランク上位に入る、スーパーグローバル大学を目指すのならば、こういった授業の質に関しても、関心を持っていくべきではないだろうか。

学生FDチームニュースレター 2015・2 No.6

(「第2回 東洋 授業への声コンクール」特集号)

平成27(2015)年2月20日 編集・発行: 東洋大学 FD推進センター学生FDチーム

E-mail: mlstudentfd@toyo.jp

学生FD活動ホームページ: http://www.toyo.ac.jp/fd//student_j.html